

広報市民リポーターだより
第2回

今回の「広報市民リポーターだより」は、石田かずみリポーターが社会福祉施設を、飯塚家司リポーターが大館市農協を訪ねてそれぞれ取材しました。

もっとと障害者とふれあう場を

リポーター 石田かずみ(御成町一丁目)

大館圏域ふくし会の合同大運動会が今年も六月七日に軽井沢福祉園運動場で開催されました。

今回のこの運動会には、七カ所の施設から園生二百六十人、職員百七十人、保護者七十人が参加していました。この運動会は、合同で開かれることになってから今年で五回目とのこと。それまでにはいろいろな問題があったそうで、そんな話を含みながら大館圏域ふくし会の常務理事施設長小野寺舜



小野寺施設長から話を聞く
石田リポーター

平さんに、私が日ごろ疑問に思っていることを聞いてみました。

私は毎年、吉野こどもの村障害者運動会に行くのですが、なぜ大館でもあのくらい大規模に開くことができないのか、私たち市民(健常者)と気軽にスキミングの出来る唯一のこのような機会をもっと前向きに考えてもいいのではと聞いたところ「私もそのことはいつも考えています。この運動会にしても、もっと大規模に開きたいと思えますし、いつかは長根山のグラウンドでも借りて開きたいと思っています。そのためには、行政や福祉関係者の理解と協力が必要なのです」と言う答えでした。

「健常者と障害者がもっとオープンマインドになるには施設サイドが、いま以上に開かれた施設づくりをしなければ、ともに手を取り合って生きていくことは無理な話です」という小野寺さん。現場にたずさわっているだけにインパクトの強い言葉でした。最後にボランティアの話の伺いました。私たちが、ボランティア活動を考えるとても大変で、な

まはんかに首をつっこむと……といった気分になったりしますが、小野寺さんは「ボランティアという用語に団体で活動する組織を思い浮かべるようですが、ボランティアは基本的には個人単位なのです。ボランティアをするんだと構えてしまうとなかなかやりにくいものなので、気軽に自分でできることで参加していただいたいのです。ですから一人ひと

めざせ一品一億円農産物
農業の拠点を訪ねて

リポーター 飯塚家司(新町)

大館市は、農業、鉱工業、林業の産業基盤の上に発展してきましたが、これからの社会状況の中でどのように変っていくかは予想できません。

この中で農業は、バイオテクノロジーを利用した農産物の高品質化、知恵の集約である農産加工品などの開発が進み、農業にかかわる人たちの英知と勇気と情熱で活性化されるものと期待されます。そこで指導的役割を担う大館市農協の浅井常務部長、武田常務指導課長に現状と今後の展開についてお話を伺いました。

大館市農協の年間の農産物取り扱いは規模は
◇米が四十五億円(ピーク時は五十六億円)、青果物は四億円、畜産物が十一億円(合計六十億)となっています。
大館の特産品は
◇ヤマノイモは、六十アールから始め、いまでは三十五畝、一億円

とりがどんな形でもかかわることができるとです」という話に、私は深くうなずいてしまいました。小野寺さんの話を聞いて、私たちがもっと気軽に手をつなげようという気持ちになりました。そしてこの合同運動会が来年の春にはより大きくなることを祈りたいと思います。パワーある小野寺さん、そして光あふれる園生、職員の方々の感動の運動会でした。

に達しており、今後も農協として力を注いでいきます。当市は栽培に適しており、本場の兵庫県からも栽培技術の視察にくるほどで、日本一といえると思います。また出荷されない規格品については、フリーズドライ(真空凍結乾燥)により保存性の高い食品として開発に成功しました。今後は販売チャンネルの整備が必要だと思います。山ごぼうは、この県北地方だけで全国の八〇%を出荷しています。このほか、きのこや葉たばこ、ホップなどもあります。

農産加工施設について
転作で最も多いのは大豆がそうです。大豆とくるとすぐ思い浮かぶのが豆腐、納豆、みそ。特にみそは、昔から各農家で造られてきたものですが、年々造る人が少なくなってきました。そこで農協が今年の初め、池内地区に農産加工施設を建設し、みそ造りを始め

ました。当初四百件を見込んでいたのですが、六月十五日現在で九百件を超えているということでした。この施設もみその製造だけでなく生産者や消費者のニーズを的確にとらえた農産加工物づくり、県北センター的存在にしたいと思っています。

また農協上川沿婦人部では、八年前から農産加工、特に漬け物の検討会を兼ねて漬け物コンクールを行っているとのこと。こうした努力の中で大館の漬け物の伝統を守り、しかも新しいアイデアを盛りこんだ新作漬け物も開発されています。これからは加工施設と販売ルートの整備を進め、ほかの地域の方々の目標ともなってもらいたいと考えます。

農業を取り巻く厳しい情勢の中で、農業は従来の農産物の生産のみの体質から脱皮し、付加価値を高めて消費者ニーズに応え得る一・五次産業(農産加工物)が活性化につながるのではないのでしょうか。



▲ミソ加工施設を取材する飯塚リポーター

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。